

## 体験型で援助を学ぶ

川口 智恵

東洋学園大学グローバル・

コミュニケーション学部 専任講師

はじめに

私は、国際政治学や政策研究のアプローチから、国際協力、特に紛争影響国への援助について研究している。基本的に援助は、政策の手段であり、豊かな国から貧しい国へ、国境を越えて他者に問題解決を提供するものである。すなわち、援助は一種の権力を含む政策行為なのである。

開発であれ人道支援であれ、その援助行為は、援助を受ける人々だけでなく、援助をする側の人々を含む将来の世代に影響を及ぼす可能性がある。そのため、直接援助に関わっていないくとも、納税を通じて援助機関に資金を提供している我々市民は、援助の効果や影響について考える必要がある。

私が担当する援助に関する講義や演習科目では、体験

型のワークを通じて、学生が援助に関わる人々の立場の違いを意識し、既存の援助の効果や矛盾について考えることを目指している。

以下、2つのアプローチを紹介する。

### 1 プロジェクト・プロポーザル作成

1つは、「プロジェクト・プロポーザル作成」である。援助プロジェクトを計画立案する援助機関―例えば JICA (国際協力機構)、国際機関および NGO の職員―になりきって、プロジェクトを作成し、発表するというものである。このワークには2〜3名以上のグループで取り組む。選んだ様々な援助機関が過去にどのようなプロジェクトを行っているのかを調べた上で、特定の国や地域の援助ニーズを検討し、ターゲットを絞り、新しいプロジェクトを考えてもらう。その際、どの程度の資金が必要か、その根拠も説明することを求める。この活動を通じて学生は、ただ既存の援助を調べるだけでなく、自分たちで新しい援助を考えるため、創造的にならざるを得ない。井戸掘りと水道の敷設にかかる費用の違いや人々の生活との関係を検討したり、警察への

能力支援だけでなく地元の人たちの治安への意識向上の必要性に気が付いたり、発見を基に新しいプロジェクトを作成していくのである。その際、かかる経費も検討させるのがポイントである。なぜなら、多くの学生は、援助に多額の税金が使われていることを知り、「なぜ、援助する必要があるのか」「どうしたらより良い援助になるのか」を考えるようになるからである。

発表時、発表者以外の学生には、このプロジェクトに出資したいかどうか、いくらなら出資できるか、出資者の観点からプロジェクトの価値を吟味するための質問を行い、最終的に評価してもらおうようにしている。つまり、援助機関が出資を募るためにプロジェクト発表をするという形式にするのである。このプロジェクト作成活動は、援助プロジェクト形成のプロセスを疑似体験するだけではなく、出資を得るためのアピールに工夫をこらしたり、それが税金を含めた資金を使用するに値するものなのかを吟味したりすることを通じて、発表者と聞き手の両方が、援助の意義を考える機会を設定している。

学生同士の評価は甘いものになりがちであるが、最も出資したいと思った発表を選び、その理由とともに

Microsoft Forms などに記入させる方式にして当日講評すると、選ばれた側の励みにもなり、良いフィードバックになっていると思われる。

## 2 被支援者体験

2つ目は、援助される側の目線で考えさせるための「被支援者体験」である。日本のような先進国に住む学生ばかりが履修生だとしても豊かな先進国の援助者目線で、途上国で起きている問題は、自分達には決して降りかからない遠い国の出来事と考えてしまいがちである。そのため、援助を他人事のように捉え、こうした認識が生み出す援助の権力構造や被援助国が抱える本当の問題を見つけられずに、「援助＝良いこと」として考えてしまうことが少なくない。「被支援者体験」では、例えば「自分が難民になったら」「自分が貧困者だったら」など、支援される側の立場に立ち「自分事」という意識を持たせることを重視している。

難民の場合、国際NGO Save the Children が制作したこの動画 "Most Shocking Second a Day""Still the Most Shocking Second a Day" を用いて、「もし

自分がある日突然難民になったら、どのような経路をたどるのか」を疑似体験してもらおう。動画では、イギリスで戦争が起こったと仮定し、ある少女が難民となって家族と引き離され、大陸をさまよう様子が描かれている。視聴の際には、日本人もまた太平洋戦争末期に大変な思いをして大陸から引き揚げてきたといったエピソードも紹介し、私たち日本人の経験とも結びつけるようにする。また、この2つの動画は、2011年に始まったシリア紛争で大量にヨーロッパに流出したシリア難民の現状を模したものである。そこには、よくイメージされるアジアやアフリカの国々などではなく、私たち日本人と同じような生活をしていた国の人々が、ある日突然難民となり、家族と別れ、様々な支援を受けながらも逃避行せざるをえなくなる現実が映し出されている。難民になるという出来事を自分事として考える一助となるはずだ。

この動画は授業以前に観たことがあるという学生が多いものでもある。援助を学ぶ中で改めて観ると、援助を提供する側と援助を受けざるを得ない状況に陥ってしまった人々とのギャップを感じるようである。また、自

分にこのようなことが起きるとは到底考えられないという学生が多い。

そこで実際に、もし北海道から順に軍事侵攻があり、東京まで攻撃が及びそうな場合、いつ、どこに、誰と、どんな手段で何を持って逃げるか、逃げられるのかも考えてもらう。例えば、海外に逃げるとしたらどのような手段でどこに逃げるのか、もし韓国政府が受け入れを表明したら？どこに行けば支援の情報が得られるのかなど具体的に考えてもらうようにする。

そうすると、未だ幼い兄弟がいるから逃げにくい、親戚の家がある田舎に逃げる、韓国語ができるから韓国でも、といった個別の事情で避難行動が変わること、実際には多くのものを持っていけるわけではなく、多くの支援も期待できないことを疑似体験し、改めて難民や避難民という状況を理解することができるようである。

### 最後に

ここでは詳細に立ち入らないが、貧困のケースでは、東京都の貧困状況や実際に東京都や都内のNGOが行っている貧困対策を学び、予算を決めて貧困者対策をつ

くるワークを行うこともある。

こうした難民（自分事）体験をした後に、再度援助する側に立つてもらおうと180度違う視点でプロジェクトを作成するようになる。被支援者中心のプロジェクトをつくりたい、そのためにはもつとニーズを知る必要があることにも気が付く。同時に既存の援助に対する批判的な視点も養われる。

コロナ禍の授業では、実際に援助に関わる講師をお招きしてプロジェクト評価に参加していただくことが叶わなかった。一方で、オンラインで、アフリカなどで援助に関わる方々や支援を受けている人たちと動画をつないで、実体験をお話いただくことが可能となった。IOTを活かして、体験型の授業の可能性を広げていきたい。

以上、私の講義では、こうした体験型のアクティビティを実施することを通じて、援助は、富める先進国が実施する「良いこと」であり、援助の受け手は貧しいかわいそうな人たちというステレオタイプから抜け出し、援助が持つ権力構造と同時に、援助の意義を考え、援助を含む国際協力に「自分事」として関心をもつ学生を一人でも増やしたいと考えている。

追手門学院大学文学部 ・ 西尾 宣明「文学部長」

# 人文学の多様な学びを追究

## 1 はじめに

2022年4月に、追手門学院大学は、国際教養学部国際日本学科を改組し、日本文学、歴史文化、美学・建築文化の三専攻を有する文学部を設置した。その教育的は「日本文学・日本語・日本史・日本文化に関する学びを通して、高い理解力と思考力を身に付け、専門的知識を活用して思考・行動ができるとともに、創造的に問題解決を図り、新しい文化や時代を創出することができる人材を養成する」ことであり、日本・言葉・歴史・文化などを学びのキーワードとして掲げている。この本学の新学部を紹介したい。

## 2 三つの特徴

本学文学部の三つの特徴を記す。一つの特徴は、学びの領域の幅広さである。日本文学専攻では、古代から近代までの物語、詩歌、小説や語彙、文法などを学べるだけでなく、アニメやドラマ、映画などの画像・映像作品も研究することができる。歴史文化専攻では、古代から近代までの歴史はもちろんのこと、アジア圏をはじめ外国との関係を視野に入れる日本のあり方や、ポップカルチャーなどの現代日本文化についての調査・研究も対象としている。このように、従来多くの文学部で対象としてこなかった研究分野も学びの対象としている。これは、文化とは、



[写真] 2019年に開設したアカデミックアーク(I期棟)

固定的一元的なものではなく、時代とともにその表象を生成変化させていく多様性を本質とするものであるという、考えに基づいているからである。

二つめの特徴は、文理融合型の美学・建築文化専攻を設けたことである。ここでも、従来の工学的視点からの建築学にとらわれず、人文学的な視点から学ぶ建築学を追究している。日本古来の建築技術や様式美から、現代の先進的な空間デザイン、建築設計まで学ぶことができる。そして、空間デザインと、人間や社会との関係性を考察することを重視し、快適な社会創造のスキルを身に付ける

ことを目的としている。

三つめの特徴は、多くの資格が取得できることである。学びの成果を具体化するものとして、中学校・高等学校一種教員免許状（国語・地歴など）や学芸員、社会教育主事、日本語教師、また二級建築士・木造建築士受験資格他多く

の資格取得が可能である。

### 3 志願者増と最新設備の新キャンパス

初年度の2022年度文学部入試は、総計で志願者は4280名であった。前身の2021年度国際教養学部国際日本学科の志願者1908名に比し、220%であった。この点から、現代社会にふさわしい人文学の学びを保証する本学文学部は、現在の高校生たちから高い評価を得ていると考えている。

最後に、追手門学院大学では、2025年度からのメインキャンパス化を目指し、茨木総持寺キャンパスの整備計画が進行中である。2019年に開設したアカデミックアーク（I期棟）は、優れた建築に与えられるアルカシア賞・ゴールドメダル、鈴木禎次賞・優秀賞、BCS賞を受賞した。それに続く新校舎が建築中である。新校舎は、教育・研究環境のさらなる充実に重点を置き、多彩な演習や講義スタイルを可能とする空間が完成する予定である。

本学文学部の多様で創造的な学びは、最新の教育設備や空間の中で、より一層進化するものと確信している。